

詩編 31 : 6

ルカによる福音書 23 : 44~49

「イエスさまの死」

【前奏】

【招詞】 詩編 33 : 1~5

【祈祷】

【聖書】 詩編 31 : 6、ルカによる福音書 23 : 44~49

【説教】 「イエスさまの死」

<十字架の出来事>

今日はいよいよ、十字架にかけられたイエスさまが、息を引き取られる場面です。

その時に起こった出来事、イエスさまが語られた御言葉、それを見つめていた百人隊長や人々の様子。それらが、イエスさまが何を成し遂げて下さったのか、イエスさまは何者であったのかを、わたしたちに伝えています。

これは、2000年前に、一人のユダヤ人が十字架で処刑された、というだけの出来事ではありません。そうであるならば、正直、今のわたしたちには何の関係もありません。

しかし、十字架で死なれた方は、まことの人となられた、まことの神の御子であられました。この方の苦しみと死は、神さまに背き逆らう、すべての人が受けるべき罪の裁きを、身代わりになって引き受けられたものでした。

イエスさまの十字架の出来事は、神さまがご計画なさった、わたしたちを罪から救い出すための出来事だったのです。神さまから離れてしまったわたしたちの罪を赦し、神さまの愛に立ち帰らせるための出来事だったのです。

イエスさまの十字架は、これまでも、今も、これからも、わたしたちを赦し、わたしたちを生かします。今日は、このイエスさまの十字架の死の出来事に、耳を傾けたいと思います。

<イエスさまの苦しみ>

さて、44~45節にはこうありました。「既に昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、それが三時まで続いた。太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。」

昼の十二時頃から、三時まで、イエスさまは三時間以上も、十字架の上で苦しみを受けておられました。

わたしたちは、細い針を一本ぶさりと刺されただけでも、そんなに長くは耐えられないのではないのでしょうか。しかし、イエスさまはさんざん鞭打たれた上に、十字架に両手両足を釘で打たれ、想像を絶する肉体の痛み苦しみを受け続けておられました。しかもその間、あらゆる侮辱、ののしり、あざけりを受けておられました。

イエスさまは、体にも、心にも、深い痛みと苦しみを負わされたのです。

そうして、ただ死を待つばかりの時を、イエスさまはひたすら耐え忍んでおられました。たとえ耐えることが出来ない状態であっても、もはや、ただただ、その苦しみの時を最後まで受け入れていくしか、他に道はありませんでした。

…これが、イエスさまが、わたしたちの救いのために成し遂げて下さったことです。

ここに至るまでは、多くの奇跡の御業や、驚くべき癒しの御業を行なって下さいました。しかし、究極的にイエスさまがして下さいたこととは、わたしたちを救うために、十字架の痛みと死を受け入れる、ということであったのです。

<人の罪>

この、イエスさまが受けておられる痛みと死は、わたしたちの罪によるものです。

聖書が語る罪とは、神さまに造られたわたしたちが、神さまの愛を忘れ、恵みを忘れ、神さまから離れてしまうことです。聖書の「罪」という言葉には、「的外れ」という意味があります。

神さまに造られたわたしたち人間は、本当は、命と恵みの源である神さまの方向を向いて、神さまに向かって、神さまを礼拝して、歩むべき存在です。人は、神さまの御前に立ってこそ、本当に人間らしく、感謝と喜びをもって生きられるのです。

それなのに、神さまに背き、逆らい、自分勝手に歩いていく。まことの神さまを、自分の神とせず、自分の望むもの、好きなものを拝んでいる。神さまの恵みを忘れ、自分の力で生きてるように思う。神さまの思いではなく、自分の思いに従って歩んでいる。

罪とは、そのように、向かうべき神さまから反れている、そんな「的外れ」な生き方をしてしまうことなのです。

神さまは、わたしたちが神さまに応答して生きること、神さまと共に喜んで生きingことを望んで下さっています。しかし、わたしたちはその神さまを裏切り、神さまの思いを蔑ろにし、神さまに背き、離れたのです。

神さまは、このわたしたちの罪に対して、激しく怒られます。わたしたちがこの罪を裁かれるならば、もはや滅ぼされるしか道はありません。自分のどのような力によっても、どんなに良い行いをしようとしても、わたしたちはどうしようもなく罪に捕らわれており、自分自身の罪を償うことさえ出来ない。わたしたちは皆、そのような罪人であったのです。

<神の裁き>

今日のところには、全地は暗くなり、太陽は光を失った、とありました。

ルカによる福音書の 22 : 53 では、十二弟子の一人のユダに裏切られ、逮捕される時に、イエスさまが「今はあなたたちの時で、闇が力を振るっている」と語られました。

闇の力。罪の力。滅びの力。これが、力を振るっている。

全地が暗くなったとは、地上が人の罪の闇で覆われているということでしょう。

その闇の只中で、神さまの御心に背く人々の「十字架につけろ」との叫びによって、罪のない神の御子イエスさまが、今、十字架につけられているのです。

神の御子を十字架につけ、神はいらない。従いたくない。役に立たない。そう叫んで、呪い、殺そうとする。これが、罪に捕らわれた人間の姿、闇に覆われた罪人の姿です。

また、全地が暗くなること、太陽が光を失うことは、旧約聖書においては、人の罪に対する、神さまの怒りを示しています。

さらに、その罪のゆえに訪れる、神の裁きの日についても、アモス書という書物では、次のように語られています。「その日が来ると、と主なる神は言われる。わたしは真昼に太陽を沈ませ／白昼に大地を闇とする」。

全地は暗くなり、太陽は光を失った。つまり、これはこの時に、まさに罪の闇に捕らえられている者に対して、神の怒りが下り、裁きが行われようとしている、ということなのです。

さらに、「神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた」とありました。

他の福音書のマタイとマルコでは、実はこの出来事は、イエスさまが死なれた直後に起こったこととして語られています。

神殿の垂れ幕とは、罪人である人間が、聖なる神さまの御前に直接出て死んでしまわないように、神さまとの間を隔てるための幕でした。

しかし、イエスさまが十字架で死なれ、人間の罪をご自分の命によって贖って下さったことによって、もはや罪を赦された者は、幕を隔てることなく、直接神さまとの交わりに与る道が拓かれたのだ。そのように解釈されています。

ところが、ルカによる福音書だけは、神殿の垂れ幕が裂けたのは、イエスさまが息を引き取られる「前」であった、と記しています。

そうであるならば、マタイやマルコとは意味が違って来るのかも知れません。つまり神殿の垂れ幕が裂けるとは、神さまを礼拝する場所が失われてしまうこと、罪によって、またその裁きによって、神さまとの交わりが失われてしまうことを示していると考えられます。

罪の闇に覆われた人間が、その罪のゆえに裁かれ、神さまとの交わりを絶たれてしまう。

本当はそれこそが、神さまに造られた人間にとって、最も悲惨で、最も恐ろしく、最も絶望的なことなのです。神さまから離されて、恵みを失ってしまうことこそ、人が本当に死んで、滅びる、ということなのです。

しかし今、この罪の闇の中で、神の怒りの裁きの中で、その悲惨と絶望を味わっておられるのは、神の御子イエスさまお一人です。

なぜなら、父なる神さまは、わたしたちの罪をご覧になり、激しくお怒りになってもなお、わたしたちが滅びることをよしとされず、わたしたちが悔い改めて、神さまの御許に帰ること。的外れから、方向転換をして、再び神さまに正しく向かって歩む者となることを、望んで下さったからです。

人間の側が、わたしたちが、どれだけ神さまを裏切り、背き、逆らおうとも。神さまは、その激しい怒りにまさるほどに、わたしたちのことを愛し、憐れみ、生かそうとして下さるのです。憐れまずにはおれない、と言われるのです。

そのために、父なる神さまは、わたしたちすべての罪と、その裁きをすべて、愛する独り子であるイエスさまお一人に負わせられたのです。

<イエスさまの叫び>

そうして、わたしたちすべての罪を担われたイエスさまは、十字架の上で、大声で叫ばれた、とあります。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」

実は、ここでも他の福音書は違う言葉を記しています。マタイとマルコは、イエスさまは最後に、「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」、つまり「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と大声で叫ばれた、とあります。

神の御子が、神さまに向かって「なぜわたしをお見捨てになったのですか」と、絶望の叫びを叫ぶ。これは衝撃的な御言葉です。

しかし、ここにこそ、イエスさまが、すべての人間の罪を負われ、その裁きを引き受けられ、わたしたちが味わうべき絶望を、ご自分のものとして下さった。わたしたちが、神に見捨てられたと叫ぶざるを得ない、その罪の果てにも、絶望の果てにも、神の御子イエスさまは来て下さり、そのようなわたしたちを担って下さり、共にいて、共に叫んで下さる。そのような慰めが指し示されています。

「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」。神の御子イエスさまがこのように叫んで下さったからこそ、わたしたちはもはや見捨てられることはない。わたしたちが、罪の果てにあっても、絶望の果てにあっても、そこにさえ、イエスさまは共にいて下さる。そのような確信と、慰めが、与えられるのです。

では、どうしてルカによる福音書の著者は、イエスさまの、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」との御言葉を記したのでしょうか。

この御言葉から、神の御子イエスさまは、まことの人となられたけれども、まさに神の御子として、最後まで父なる神さまへの信頼を貫かれたのだ、と語られることがあります。

まさにそのようにして、イエスさまは神さまへの従順、信頼を全うされ、罪に打ち勝たれたのだと。その通りかも知れません。

また他には、イエスさまは死に際して、父なる神さまにすべてをお委ねし、まことの平安の内に息を引き取られたのだ。最後には、すべてをまったく父なる神の御手にお委ねし、安らかであられた。それは、わたしたちの模範となるお姿なのだ。そのように語られることもあります。その通りかも知れません。

でもそうであるならば、果たしていざ、自分が痛みや苦しみの極限の中にある時になって、

そのように安らかであるものか。ゆだねて安心することができるものか。神の御子であればこそ、そのように出来るかも知れないが、わたしには無理なのではないか。そんな不安もよぎります。

しかし、これはやはり、絶望のゆえの叫びではないか。そう語られるものもあります。

「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」

確かに、御言葉だけを見れば、平安に満ちた、信頼に満ちた、御言葉です。

しかし、ここには、この御言葉をイエスさまは、「大声で叫ばれた」とあります。

痛みと苦しみと絶望の極限の中で、死が目前に迫りくる中で、闇に覆われ、神の裁きの厳しさを味わっておられる只中で、大声で叫ばれた。イエスさまのそのお姿は、どう見ても、平安や、安らかさからは、程遠いお姿です。

ところで、この「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」との祈りは、詩編 31:6 に語られている詩編の言葉です。今日読まれた旧約聖書の箇所です。こうありました。「まことの神、主よ、御手にわたしの霊をゆだねます。わたしを贖ってください。」

「主よ、御手にわたしの霊をゆだねます」。

「ゆだねる」というと、わたしたちは自分の意志で、神さまに自分を託すこと、抱えていることをお任せすること、という風に捉えるのではないのでしょうか。

ですから、わたしたちは普段、「神さまにすべてをおゆだねします」と祈りながら、中々神さまにすべてをゆだねきれていない。どこか自分の思いを手放せず、すべてを任せきることが出来ていないな、というようなことを思うのではないのでしょうか。

しかし、詩編が書かれているヘブライ語では、注解書（現代聖書註解『詩編』メイズ）によれば、ここは直訳すると、「わたしはわたしの生命をあなたの主権的御旨にゆだねます」となっています。それは、分かりやすく言い換えれば、「神よ、わたしに起こることはすべてあなたにかかっているのです。ですからわたしはそれをそのまま享受することを望みます。」そのような祈りであるというのです。

すべては神さまにかかっている。わたしに起こることは、すべて神さまが知っておられる。ですから、わたしはただ、わたしに起こることを、あなたのゆえに、受け入れることが出来ますように。この詩編において、「御手にゆだねる」とは、そのような祈りだということです。

「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」

イエスさまのこの叫びは、祈りは、イエスさまがそのようにして十字架の死を、わたしたちが受けるべき罪の裁きを、耐え難い苦しみを、滅びの死を、絶望を、父なる神さまの御心のもとで、すべて受け入れて下さった。やはり、そのことを指し示しているのではないのでしょうか。

そうしてイエスさまは、十字架の上で、息を引き取られたのです。

そして、すべての人の罪を担って下さったイエスさまが、わたしたち罪人の代表としてこの祈りを叫ばれたことは、やはり、わたしたちにとって大きな慰めとなるのではないのでしょうか。

神に見捨てられたと叫ぶような、闇の中にある時も、苦しみと嘆きの絶望の中にある時も、耐えられないようなことが起きる時にも、わたしたちは、イエスさまがわたしのすべてを担って、そのように祈って下さったゆえに。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」「父よ、わたしのことはすべてあなたにかかっているのですから、受け入れることをなさせて下さい。耐え忍ぶことが出来るようにして下さい。そして、あなたが望まれていること、あなたの御心を行なってください。」そう祈ることが出来るのです。

このように叫び、祈ることが出来るのは、天の父なる神さまが、わたしたちを罪から救いたい、生かしたいと望んで下さる、愛と憐れみに満ちた方であり、誠実な方であり、約束を必ず実現して下さる方だからです。ただそのことに、すべてがかかっているのです。

ですから、地上に来られた神の御子イエスさまは、父なる神さまがそのような方であることを、御言葉を通して、御業を通して、ご自分の御生涯のすべてを通して、わたしたちに明らかにして下さいましたのです。

わたしたちは罪の果てに、もはや父なる神さまに向かって叫び求めることさえ、祈ることさえ、出来なくなっていたのかも知れません。打ちひしがれて、ただ倒れていただけかも知れません。

しかし、イエスさまが、そのようなわたしたちを担い、わたしたち罪人の代表となって下さり、神さまに見捨てられたような絶望の中から、罪の闇の中から、絶望の中から、それでも父なる神さまに大声で叫び求め、ゆだねることが出来る祈りの道を、拓いて下さったのではないのでしょうか。十字架のイエスさまが、わたしたちの罪も、苦しみも、裁きも、絶望も、すべてを引き受けて下さり、そして、父なる神さまの御手に、わたしたちのすべてをも、ゆだねて下さったのではないのでしょうか。

「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」

そうしてイエスさまは、激しい苦しみと、大きな叫びの末に、息を引き取られたのです。

<神を賛美した>

さて、このイエスさまの死に対して、一番最初に応答した人間が、これまで共にいた弟子たちでもなく、御言葉を聞いて従ってきた者たちでもなく、ユダヤ人でもなく、女性たちでもなく、ローマの兵隊である百人隊長であった、というのは、驚くべきことです。

彼はユダヤ人ではありません。異邦人であり、異教の人です。恐らくイエスさまを十字架につけるのを手伝った。そして彼は、イエスさまの一部始終を見つめていたのです。

47 節にはこうあります。「百人隊長はこの出来事を見て、『本当に、この人は正しい人だった』と言って、神を賛美した。」

「本当に、この人は正しい人であった」。

これは、イエスさまが罪のないお方でありながら、罪に定められ、十字架に付けられたということの、ピラト、ヘロデ、一緒に十字架につけられた犯罪人の一人、に続く、四人目の無罪の証言者ということでもあります。

しかし、ただ単に、本当は無罪で正しい人だったのに、死刑になり、十字架に付けられてしまったのだ、というだけの意味ではないでしょう。

「正しい人」とは、神さまの御心に適った人、神さまに従い、神さまとの正しい関係に生きる人、ということです。

百人隊長は、イエスさまの十字架の一部始終を見つめ、まことにイエスさまが神さまに選ばれた方であり、神の御子であり、神さまに従って救いの御業を成し遂げられたメシアである、ということを知ったのです。

重要なのは、ここで百人隊長が「神を賛美した」と語られていることです。

異邦人が、それもイエスさまの十字架の死に加担した者が、十字架のイエスさまの御前で、神さまを見上げ、神さまを礼拝し、賛美したのです。

最初の方で、イエスさまが十字架に架けられた時に、全地が暗くなり、太陽が光を失い、神殿の垂れ幕が裂けたのは、人の罪が全地を覆い、裁きがなされ、神さまへの礼拝が失われた、神さまとの交わりが絶たれた、ということが示されているのだろう、とお話ししました。

しかし、イエスさまがご自分の十字架の死によって、ご自分を犠牲にすることによって、すべての人の罪を贖って下さった今や、神さまに動物の犠牲をささげる神殿の礼拝は、確かにこの時、終わったのです。

この時、イエスさまの十字架の御業によって、すべての人は罪を赦され、罪の支配から、神さまの支配へと移され、神さまと親しく交わることが出来る、新しい礼拝が始まりました。

それは、イエスさまの救いを信じる信仰によってささげられる礼拝です。

つまり、イスラエルの民のユダヤ人であるとか、異邦人であるとかで分け隔てされず、イエスさまの十字架による罪の赦しを信じるなら、誰でも招かれている礼拝なのです。

イエスさまの十字架は、世界の歴史において、神さまとすべての人間との交わりを新しくする、人類のターニングポイントだった、と言ってもよいでしょう。

そして今わたしたちも、イエスさまの十字架の御業によって罪を赦され、滅びる者から、生きる者とされ、あの百人隊長と共に、イエスさまの十字架の御前に立って、神さまを賛美し、礼拝をささげているのです。

イエスさまの十字架は、今ここに生きる、このわたしのために起こった、そして、世のすべての人々のために起こった、このような救いの出来事です。

この救いの恵みを、すべての神さまに造られた人々が知り、悔い改めて、感謝して受け取り、共に神さまを賛美することが出来ますように。

【お祈り】

天の父なる神さま

御子イエスさまの十字架の苦しみと死によって、わたしたちに罪の赦しと、新しい命を得させて下さったことを、感謝いたします。

どのような罪の果てにも、絶望の果てにも、イエスさまは来て下さり、わたしたちを担って下さり、あなたを賛美し、礼拝する道へと導いて下さいます。

あなたの恵みの御心に、救いの御心に、与らせて下さい。父なる神よ、わたしの霊を、わたしたちのすべてを、あなたの御手にゆだねさせて下さい。

神の御子であり、救い主である、イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】 298 「ああ主は誰がため」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讃美歌】 26 「グローリア、グローリア、グローリア」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、
あなたがた一同と共にあるように。アーメン